



The Pragmatics Society of Japan  
日本語用論学会

# NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No. 33/ Spring 2015

会長 林 宅男

事務局 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学外国語学部 山本英一研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行【預金種目】当座【店番号】099【口座番号】0130378【口座名】日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

日本語用論学会 Newsletter 第33号をお届けします。第18回大会のお知らせがあります。発表申込みの締切りが7月31日ですので、ご注意ください。

=====

## ★会長メッセージ

「語用論研究の貢献」

林宅男 (桃山学院大学 教授)

新緑の候、会員の皆様にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

まずは、昨年度の取り組みのご報告を簡単に述べさせていただきます。前回の大会は、2014年11月29日(土)～30日(日)の二日間に亘り京都ノートルダム女子大学で開催されました。観光都市京都での、しかも行楽シーズン中の開催ということで、早くから宿の確保がしにくい状況となっていました。お陰様で参加者200名を超える盛会となりました。この場をお借りして、大会の企画や実行に携わっていただきました多くの関係者の皆様に深くお礼申し上げます。尚、発表会場の「新ユージニア館」は昨年新築されたばかりの建物で、学会の大会会場としてこの建物が使用されたのは本学会が初めてということでした。大変綺麗で立派な校舎の使用を許可していただきましたことを大変ありがたく思っております。申すまでもなく、大会の開催は学会の最も重要で大きな行事で、委員の方々にはその準備から実行にいたるまで大変なご苦勞をいただいております。

基調講演やシンポジウムの企画を練るのも大変ですが、今年も多くの方が発表に応募していただけたらというのも関係者にとって気になるところです。前回の結果は幸い前々回とほぼ同じで、応募数は、研究発表59、ポスター発表7、ワークショップ4で、そのうち9件は海外からの応募でした。これで、過去3年連続で合計70件以上の応募があったことになり、大変嬉しく思います。このように多くの応募をいただきながら、時間と場所等の制約から(特に「研究発表」への応募は56%の採用率となり)、ご希望どおり発表いただけなかった論文も多くありましたが、応募いただきました方には全員に審査のコメントをお送りいたしました。惜しくも発表いただけなかった皆様には、それらを参考にさせていただき、今年度も、是非応募していただければ幸いです。

本学会では10回大会以降国際化を推進するために、毎年、海外からの基調講演者の招聘や英語でのシンポジウムの他、海外への一般応募の呼びかけと英語での発表を募集しています。前回の大会では海外からのワークショップ、ポスターセッションでの発表を含めると合計18件と多くの英語での発表がありました。更に昨年の運営委員会では、今後も海外(特に近隣諸国)との交流を推進する目的で、海外の関連学会との間で研究発表者の相互派遣を始めることになりました。今年度は、既に中国語用論学会との間で、大会での「特別発表」の相互派遣が決まっております。また、海外の学会活動への一層の関心を高め、積極的な発表や参加を促す目的で、本学会のホームページに、海外の関連学会や学会誌の外部リンクを増や

しました。

言語の研究は単に言語の研究者のためだけでなく、社会の一般の人の役に立つものでなければならぬという認識は、言語学者の間で徐々に深まってきました。特に語用論は、その社会的貢献が大きく期待される研究分野であります。本学会でも、昨年の大会では、「臨床語用論」(Clinical Pragmatics) という人々の福利に関係する研究を取り上げ、初日には Michael Perkins 教授 (University of Sheffield) を迎えての基調講演、二日目には医療や分野でご活躍の3人の講師によるシンポジウムを行いました。講師の皆様方には、臨床的場面での言語障害の分析の方法や、専門家とクライアントとのコミュニケーションのあり方等、様々な角度から、最先端のご研究をご紹介いただき、この分野の研究に対する理解を一層深めることができましたことを大変嬉しく思います。

さて、語用論は、モーリス (Charles Morris) がその定義の中で述べているように、言語記号が (その解釈者に対して) どのような「効果」(effect) を持つかを扱う分野であるとも言えます。この「効果」には様々な側面があります。また日本では「言霊」(ことだま) という言葉さえありますように、それには様々な力を結びつけることができます。例えば、グライス (Paul Grice) の「非自然的意味」(meaning -NN) やスパーバーとウイルソン (Dan Sperber and Deirdre Wilson) の「伝達の原理」(communicative principle of relevance) では解釈者に何らかの効果を生むことが意味を伝達する本質的な要件とされ、オースチン (John Austin)、サール (John Searle) の「発語内力」(illocutionary force) や「発語媒介行為」(perlocutionary effect) では発話が相手に対してどのような影響や解釈を及ぼすかを扱います。これらは、意図伝達や解釈の原理に関わるものですが、その他に、語用論研究の多くは、具体的な相互行為の場面における「効果」を扱います。それは「どうして (あの表現ではなく) この表現が使われたのか」という課題に関わるもので、話者の観点、心的態度、スタンスに関わる言語使用の「効果」もそれに含まれます。「物は言いよう」(It's not what you say, but how you say it) という諺もありますように、同じ情報でも、どのような言語形式 (語彙、構文) を選択するののかによって相手に伝える意味や影響は大きく変わってきます。そのような選択の「効果」には、ラネカー (Ronald Langacker) が指摘する話者による世界の「捉え」(construal) の効果とも深く関わっています。更に、物事を概念的にどう捉えるかは、言語の使用に関わる様々な

場面の (心理的、対人的、社会的) 効果と結びついています。「選択体系機能言語学」(Systemic Functional Linguistics) では、言葉の選択が、言語活動のコンテキストやその役割をどのように特徴づけるのか、「批判的談話分析」(Critical Discourse Analysis) では、更に、それがどのようにイデオロギー形成や社会的現実の (再) 生産と結びついているかを問題にします。語用論が依拠する発話の「効果」に基づく言語分析は、(先の大会で扱われた「臨床語用論」を含む) 「社会の役に立つ言語研究」として貢献できるだけでなく、それを起点とすることで、言語の意味や形式の理論的研究に対しても、多くの説明的資源を提供することができるのではないかと思います。

### \*\*\* 第 18 回大会のお知らせ \*\*\*

2015 年度の第 18 回大会は、以下のとおり、名古屋での開催となります。会員の皆様からの発表ご応募・ご参加をお待ちしております。なお、未確定部分につきましては、確定次第、順次 HP で更新していきますので、ご確認ください。

◆日時・場所 2014年12月5日 (土)、6日 (日)  
名古屋大学  
<http://www.nagoya-u.ac.jp/>  
名古屋市千種区不老町  
052-789-5111 (代表)

#### (1) 基調講演 (12月5日 (土) 午後予定)

題目: 「言語使用の普遍性と多様性: 語用論的類型論の探求」 招聘講演者: ニック・エンフィールド教授 (シドニー大学)

**Plenary Lecture: Universals and diversity in language use: explorations in pragmatic typology**

**Professor Nick Enfield (University of Sydney)**

Abstract: For decades, linguists have made much progress by systematically comparing phonological and morphosyntactic features and subsystems of the world's languages in an attempt to answer the following two questions.

- (1) In what ways are all languages the same?
- (2) In what ways, and to what extent, do languages differ? However, relatively little typological work has addressed universals and diversity in the pragmatic domains of language usage. In this talk I will discuss some new comparative research comparing language usage in very different linguistic and cultural contexts. Case studies from the

domains of requests, turn-taking, and other-initiated repair will be presented, with discussion of their implications for the relation between language and cognition.

## (2) 公開シンポジウム

(12月6日(日)午後予定)

テーマ:「言語間の語用論的プラクティスの異同を比較する:言語人類学, 談話分析, コーパス認知言語学, 機能主義的類型論の観点から」

司会:堀江薫(名古屋大学) 講師:ニック・エンフィールド(シドニー大学) 片岡邦好(愛知大学) 秋田喜美(名古屋大学)

コメンテーター:大堀壽夫(東京大学)

**Symposium:“Comparing Pragmatic Practices across Languages: Views from Linguistic Anthropology, Discourse Analysis, Corpus-based Cognitive Linguistics, and Functional Typology”**

Chair: Kaoru Horie (Nagoya U.) Speakers: Nick Enfield (U. of Sydney), Kuniyoshi Kataoka (Aichi U.), Kimi Akita (Nagoya U.) Commentator: Toshio Ohori (U. of Tokyo)

## (3) Pre-conference workshop

(12月4日(金)午後@名古屋大)

エンフィールド教授の著書 *Relationship Thinking* の翻訳(大修館書店, 11月予定)にちなみ、訳者の横森大輔氏(九州大), 梶丸岳氏(京都市立芸術大), 遠藤智子氏(日本学術振興会 RPD/筑波大), 木本幸憲氏(京都大), エンフィールド教授を交えてワークショップを予定。

**Pre-conference workshop featuring the Japanese translation of Prof. Enfield's *Relationship Thinking***

Participants: Daisuke Yokomori (Kyushu U.), Gaku Kajimaru (Kyoto City U. of Arts), Tomoko Endo (JSPS-RPD/U. of Tsukuba), Yukinori Kimoto (Kyoto U.), Nick Enfield (U. of Sydney)

## (4) Post-conference 公開講演会

(12月7日(月)午後@名古屋大)

(語用論学会中部地区研究会との共催を検討)

Post-conference public talk by Prof. Enfield

参考: Nick Enfield 先生 関連サイト:

<http://nickenfield.org>

### ◆発表募集

発表言語は日本語と英語の両方で、発表形態は、今まで通り、口頭発表、ポスター発表、ワーク

ショップの3種類です。なお、ワークショップにつきましても、一つのテーマについて様々なアプローチとから深く検討し研究者の交流が図れる良い機会でもあり、今後も一層促進していきたいと思っておりますので、皆様是非奮って応募いただきますようお願いいたします。以下に応募要領を示します。

### ◆発表形態

- 1) 口頭発表: 発表 25 分+質疑応答 10 分
- 2) ポスター発表: 1 時間 40 分 (掲示時間)
- 3) ワークショップ: 1 時間 40 分、特定のトピックについて3名以上の団体(司会者を含む)で応募(ワークショップは団体発表のみとなります)。  
発表言語: 日本語もしくは英語。

### ◆ 発表申し込みについて

申し込み締切: 2015年8月14日(金) 必着  
申し込み先: 本学会のHPにアクセスください。  
申し込み原稿の体裁: 発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ体裁となります。

申し込み原稿は、用紙サイズをA4とし、日本語の場合は2,500字以内、英語の場合は500 words 以内で作成してください。参考文献は文字数の制限に含めません。

様式は自由としますが、所属と氏名は記入しないでください。ファイル形式は、Microsoft Word 形式(doc, docx)か、PDF形式(pdf)しか受け付けておりませんので、あらかじめご了承ください。ワークショップの申し込みについては、代表者が全員の発表要旨を一つのファイルに取りまとめてください。

### ◆著者情報ファイルの作成

原稿ファイルとは別に、著者全員分の情報を記載した「著者情報ファイル」を作成してください。ファイルには、著者ごとに以下の情報を記載してください。

- 1) 氏名(漢字(もしくはアルファベット)・ふりがな)
- 2) 所属(漢字(もしくはアルファベット)・ふりがな)・身分(学年・職位など)
- 3) メールアドレス

### ◆申し込み資格

発表の申し込みは会員に限ります。第一発表者が会員でない場合、必ず申し込みと同時に入会の手続きが必要になりますのでご注意ください。

### ◆申し込み制限

単独発表・共同発表にかかわらず、一人の会員が第一発表者として申し込みできるのは、一大会

につき 1 件のみです。また、第一発表者としての申し込みがある場合、共同発表は自身が第一発表者であるものを除いて、1 件のみです。第一発表者としての申し込みがない場合、共同研究の第二発表者としては 2 件までに限られます。

#### ◆選考について

選考および研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は 9 月中旬以降のなるべく早い時期に投稿者に通知します。

#### ◆問い合わせ先

E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp

(大会運営副委員長・岡本雅史宛)

投稿に関するお問い合わせは、できるだけ時間に余裕をもってお願いします (7 月 20 日頃まで)。締め切り直前のお問い合わせには適切に対応出来ない場合がございますのでご了承ください。

=====

### ★ The 18th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan

**Date: December 5th and 6th, 2015**

**Venue: Nagoya University**

We are pleased to announce that the Pragmatics Society of Japan will be holding its 18th Annual Conference and is calling for paper presentations. With Professor Nick Enfield as a lecture speaker, our 18th conference aims at bringing together students and researchers working in this growing field of pragmatics and its related areas.

#### ◆Call for Presentations

##### 1. About presentations

Presentation Type: Lecture presentation:

Lecture 25 min. + QA 10 min.

Poster presentation: 1 h 40 m.

Workshop: 1 h 40 m. (Organization only).

##### 2. Language: Japanese or English

#### ◆Guidelines for abstract submission:

##### 1. Deadline for submitting abstracts

August 14th, 2015

##### 2. Online submission page: EasyChair for PSJ2015 (To be made available soon)

3. Submission of Abstracts: Abstracts are invited for paper presentations on any aspect of pragmatic analysis from a variety of fields,

including historical pragmatics, cognitive pragmatics, the interface between pragmatics and other disciplines, interlanguage pragmatics, social pragmatics, comparative or contrastive pragmatics studies.

Abstracts must be in English and must be submitted electronically on our online submission page, as attachment files in MS Word format (\*.doc, or \*.docx) and, if possible, in PDF format (\*.pdf).

Abstracts should be approximately 500 words in length, not including references, figures, tables, and graphs. Abstracts are accepted in the following categories:

- Lecture presentation

- Poster presentation

- Workshop

Also note that the conference office only accepts submissions from members of the Society. The first author should be a member in the case of a group presentation. For membership, please contact the business office, whose email address is shown below.

#### 4. Notification of the selection:

After October 10th

#### 5. Contact person:

E-mail: presentation -at- pragmatics.gr.jp  
(Masashi Okamoto)

### \*\*\*地区研究会コーナー\*\*\*

<九州山口地区研究会の報告>

2015 年 3 月 23 日、第 1 回日本語用論学会九州山口地区研究会が、九州大学大学院言語文化研究院の主催により、同大学伊都キャンパスで開催された。当日は発表順に、(1) 大津隆広「正当化から調整へ：after all と「だって」の共通の認知的基盤」、(2) ナデジダ・ウェインベルグ、「ロシア語のウェジリボシチと日本語の丁寧さ：類似点と相違点」、(3) 範碧琳「文末の「のだ」が終助詞「よ」と共起する時の機能について」、(4) 趙寅秋「多義語の多義項目の規定について—日本語と中国語の次元形容詞類義語「太・細」、「厚・薄」、「大・小」を例に—」の 4 件の研究発表が行われ、各発表の後に質疑応答を挟みつつ、午後 1 時から午後 5 時過ぎまで、活発で国際色豊かな研究交流の場を持つことができた。

途中で参加者の増減があったが、計 15 名が参加し、各発表に対して発表者とフロアの議論が展

開し、有意義だった。発表者には第一線の研究者から大学院後期課程の修了前後の若手までが入っており、関連性理論やポライトネスといった典型的な研究方法に加え、電子データを駆使した新しい分析法も意欲的に採用していた。どの発表も言語表現を文脈との関連で考察する点で共通し、語用論の研究会にふさわしい内容だった。研究発表の内容を部分的に紹介すると、趙の多義語の研究は、「太（い）、大（きい）」などの中国語と日本語で同じ字を使う次元形容詞について、大規模コーパスから抽出したデータを基に、メタファー的拡張用法を許す修飾関係の言語間の差異を扱ったもので、メタファー的意味拡張という問題自体は従来からあるものの、次元形容詞の基本用法と拡張用法の解釈の区別が、電子データを基に数値によって裏付けられることを論じ、コンピュータ技術の普及に伴い、語用論研究が新しい局面に入ったことを実感させるものだった。

九州山口地区は語用論研究者が散在しているなか、九州大学言語文化研究院は語用論に関心を持つ教員と院生が集まっており、今後、地区研究活動を進めるうえで重要な拠点である。同研究院の松村瑞子教授をはじめ、地区研究活動に参加された教員と院生の諸氏にこの場を借りてあつくお礼を申し上げる。今後、定期的に研究会を開催し、さらに多くの方々、特に若手の研究者が参加されるように努める所存である。(西田光一 記)

#### < 関東地区 >

2014年12月7日(日)に、青山学院大学総研プロジェクト主催、日本語用論学会共催による下記の一般公開講演会を行った。

エリザベス・トラウゴット氏(スタンフォード大学名誉教授) 公開講演会

演題 “The Pivotal Role of Linguistic Context in Constructional Change” (『構文変化における言語的コンテキストの重要な役割』)

トラウゴット氏は、青学大総研プロジェクト『英日語の周辺部とその機能に関する総合的研究』のために来日され、2013年に刊行された著書 *Constructionalization and Constructional Changes* (『構文化と構文変化』Traugott and Trousdale; CUP) の後を受け、最新の構文化に関するお話を下さった。日本では、構文文法についてはいくつかのモデルが紹介されているが、構文化という概念はまだ新しいもので、示唆に富む、啓蒙的なお話が聞かれた。

Traugott 氏の「構文化」は、Goldberg (1995, 2006) や Croft (2001) の構文文法をもとに通時的

変異(変化)について考えられたもので、Traugott and Trousdale (2013) が構文化と呼ぶものである。構文文法の中でも「使用基盤の(usage-based)モデル」に基づいており、ここでは、話者の言語に関する知識は生来的なものではなく、経験に基づくと考えられる。



講演後も、「文法化と構文化の関係」「構文化理論において(間)主観化はどう扱われるか」など興味深い質問が多く出された。

遠方からも沢山の皆様にお越しいただき、誠にありがとうございました。(小野寺典子 記)

#### \*\*\*海外研修報告記コーナー\*\*\*

2013年4月から2015年3月までの二年間、明治大学の在外研究制度を利用して、ハワイ大学マノア校に客員研究員として、商標や法コミュニケーションの言語分析、およびヘイトスピーチに関する研究を行ってまいりました。正式な所属は、William S. Richardson ロー・スクールなのですが、同時に東アジア言語文学部の先生方にも大変お世話になり、非常に充実した研究生活を送ることができました。

ハワイ大学の面白いところは、太平洋の真ん中という位置的な魅力、および土地や気候の魅力から、世界中から多彩な研究者が常に入れ替わり立ち代わりやってきます。なかなか日本ではお会い出来ないような方々もハワイでは会えたりします。

そういった環境を利用して、私自身も滞在中、6回ほど、法学と言語学と心理学に関するシンポジウムやワークショップを企画・実施しましたが、登壇者やテーマには事欠きませんでした。

また、アロハ・スピリットと呼ばれる、ハワイならではのおもてなし精神があるので、非常にホスピタリティの富んでいて、研究活動・研究集会などにも惜しみなく協力をしてくれます。そういった活動・交流を通じて、さまざまな研究上のネットワークが構築できました。

ハワイでは、さまざまな日本からいらした客員研究員の先生方と、公私にわたってご一緒させていただきました。たとえば、言語学では、それぞれハワイ大内の所属は違いましたが、ジェンダー研究の中村桃子先生（関東学院大学）や理論言語学研究の行田勇先生（大妻女子大学）ともご交誼いただきました。実は、この3人は、ハワイに来る前はまったく面識がなかったのですが、たまたま2010年に刊行した、澤田治美先生と高見健一先生（共編）『ことばと意味の使用：日英語のダイナミズム』（鳳書房）という本に、三人とも寄稿していたことがわかり、非常に不思議なご縁を感じました。さらに、作家の村上春樹先生もハワイ大学の客員研究員として滞在しておられたので、言語学の三人でオフィスに押し掛け、何度かお話をさせていただくという、大変貴重な機会を得ました。

日本に帰って来ておおよそ二か月が経ちました。ハワイ生活からのリハビリは順調です。毎日雑務に忙殺され、ハワイを思い出している暇もありません。みなさんの中で、もしハワイ大学での在外研究を考えておられる方がいらっしゃいましたら、いつでもお気軽にご相談ください。（堀田秀吾 記）

**\*\*\*事務局より\*\*\***

**★『語用論研究』16号と17号の応募状況について**

『語用論研究』はこれまで刊行が遅れておりましたが、第16号は年度末の3月後半に完成し、4月から順次発送していますので、すでにお手許に届いていると思います。第16号は、研究論文2編と研究ノート2編、また、書評論文3編が掲載されています。掲載予定だったMira Ariel氏の原稿は、次の第17号に掲載することになりました。第17号への論文投稿は3月末に締めきれましたが、14編（研究論文11編、研究ノート3編）の投稿が受理され、現在査読が行われております。第17号については、本来のスケジュール通り、年内に刊行できるよう作業を進めて行きます。（加藤重広 記）

**★ 平成26年度（2014年度）大会会計報告**

収入	
年会費	221,000
大会参加費	505,000
懇親会費	260,000
学会開催補助金(京都ノートルダム女子大学)	200,000
収入計 ①	1,186,000
支出	
印刷費	450,197
郵送費	57,326
人件費	230,400
文具費	9,037
講師経費(謝金・旅費等)	375,800
懇親会	306,636
施設使用料	151,600
支出計 ②	1,580,996
①-②	▼394,996

**★ 平成26年度決算報告（案）**

収入	前年度繰越残高	5,468,023
年会費（大会分含む）		2,002,000
一般	336口 (@5,000)	1,680,000
学生	70口 (@4,000)	280,000
賛助	7口 (@6,000)	42,000
大会参加費（2日分、221口）		505,000
現会員・新入会員	158口 (@2,000)	316,000
非会員	63口 (@3,000)	189,000
懇親会費（76口）		260,000
一般	54口 (@4,000)	216,000
学生	22口 (@2,000)	44,000
学会開催補助金（京都ノートルダム女子大学）		200,000
大会論文集		3,000
その他（『語用論研究』印税等）		22,112
合計		8,460,135

**支出**

印刷費（大会プログラム・プロシーディングズ・学会誌等）	1,138,635
郵送費	187,089
学会ホームページ サーバサービス関連費	

	7,560
事務局諸費	<b>418,818</b>
人件費（学生アルバイト）	230,400
会議費	168,163
文具費	8,837
その他（手数料など）	11,418
会員管理業務委託費	263,580
会員管理システム導入費・利用費	183,141
地区研究会運営費	40,000
言語系学会連合会費（2年分）	40,000
大会論文集PDF化作業費	66,248
講師渡航費・謝金等（7名）	538,887
懇親会	306,636
施設使用料（京都ノートルダム女子大学）	151,600
<b>合計</b>	<b>3,342,194</b>
<b>次年度繰越金</b>	<b>5,117,941</b>

### ★ 会費納入のお願い

- ◆今年度の会費を、11月末までにお払いください。
  - ◆昨年度までの会費が未納の方には、連絡用紙を同封しております。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払いください。行き違いがございました場合は、ご容赦ください。
  - ◆会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっています。
  - ◆振替用紙が同封されていない方は、すでに今年度の会費が納入済みの方です。ご協力ありがとうございます。
  - ◆年会費は、一般会員：5,000円、学生会員：4,000円、団体会員：6,000円です。
  - ◆委託業者を通じて、クレジットカードでのお支払いも可能です。
  - ◆クレジットカード以外の振込先は以下の通りです。近年、所属機関のお名前のみでご入金される方が増えてきました。会員名の確認に手間取りますので、必ず会員ご自身のお名前をお書き添えください。
1. 同封の振替用紙で支払う場合：  
郵便振替口座：00900-3-130378（ゆうちょ銀行）  
口座名：日本語用論学会  
このほか、次の2・3の振込先もご利用いただけます。
2. 他銀行のATMから振り込む場合：  
ゆうちょ銀行 支店名：099 当座 口座番号：0130378 口座名：日本語用論学会（ただし、振

り込み手数料がかかります。ゆうちょ銀行のATMからも振り込みが可能です）

3. ATMからの銀行振り込み：三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号 546 口座番号 3755278 日本語用論学会 長友俊一郎（ただし、他銀行からは振り込み手数料がかかります）

（お願い）2の場合は、事務局会計には、カタカナのお名前しか通知されません。また3の場合は、通常は通知がありません。お手数ですが、振り込みと同時に、事務局会計（長友俊一郎（関西外国語大学）：psj.treasurer\_at\_gmail.com）にお払いの年度とお名前、会員番号、所属、住所（また、所属、住所に変更がある場合も同様）をメールでお知らせいただければ幸いです。

なお、国外からのお振り込みには、  
[http://www.jp-bank.japanpost.jp/kojin/tukau/k\\_aigai/sokin/kj\\_tk\\_kg\\_sk\\_gaikoku.html](http://www.jp-bank.japanpost.jp/kojin/tukau/k_aigai/sokin/kj_tk_kg_sk_gaikoku.html)（日本語版）  
[http://www.jp-bank.japanpost.jp/en/djp/en\\_djp\\_index.html](http://www.jp-bank.japanpost.jp/en/djp/en_djp_index.html)（英語版）をご使用ください。

### ★ 大会論文集担当者からのお知らせ

「2014年度第17回年次大会の大会論文集を作成中です。ご提出いただいた論文要旨の原稿は、6月末ごろに学会ホームページ会員専用ページにアップする予定です。

なお、原稿を未提出の会員の方は至急にお送りください。

### ★East Asian Pragmatics の刊行のお知らせ

語用論関係の学術雑誌には、*Journal of Pragmatics (Elsevier)*, *Pragmatics (IPrA)*, *Intercultural Pragmatics (Mouton de Gruyter)*, *Pragmatics & Society (John Benjamins)*, *Intercultural Pragmatics (De Gruyter)* などがありますが、メーリングリストでもお知らせしましたように、昨年、新しく、*East Asian Pragmatics (Equinox)* が発刊されることになりました。

この雑誌は特に東アジアの文化と言語に関する「自然言語 (naturally occurring)」の優れた研究を出版することを第一に掲げるものです。会員の皆様には、奮って応募いただけますようお願いいたします。また、これには、日本語用論学会 (PSJ) 及び本学会と相互交流のある中国語用論学会 (CPrA) がパートナーシップとして関わっており、両学会員には 25% (オンライン) 購読料の特別割引があります。詳細は、*East Asian*

**Pragmatics** のホームページ  
<http://www.equinoxpub.com/journals/index.php/EAP/index> をご覧ください。

@@

### 《新刊・近刊案内》

(運営委員会委員をはじめとする会員諸氏からの情報をもとに作成しました。紹介文は出版社によるものを利用しています。)

■『日・英語談話スタイルの対照研究: 英語コミュニケーション教育への応用』津田早苗・村田泰美・大谷麻美・岩田祐子・重光由加・大塚容子著 ひつじ書房 (定価 4,000 円 + 税)

日本人が英会話が苦手な理由の一つに、日・英語間のコミュニケーションスタイルの違いがある。さらにその背後には、各言語話者の間では暗黙の了解となっている円滑な会話のための決まり事の違いがある。本書は英語教育を視野に入れつつ、「自己開示」「質問・応答」「相づち」「他者修復」「ターン」「話題展開」という相互作用社会言語学の観点から、日・英会話の「暗黙の決まりごと」の解明を試みた意欲的な研究書である。

■『コースブック意味論』第二版 ジェイムズ・R・ハーフォード、ブレンダン・ヒースリイ、マイケル・B・スミス著 (吉田悦子、川瀬義清、大橋浩、村尾治彦訳) ひつじ書房 (定価 3,500 円 + 税)

本書は、1983年の初版以来、好評を博してきた現代言語学における意味論入門書 *Semantics: A Coursebook* の改訂版の邦訳である。意味の基礎概念から、指示と意義、論理的意味、語用論の意味、談話の領域に加え、認知的意味まで、意味論の基本的なトピックを網羅。豊富な練習問題と丁寧な解説を軸とした実践的なコースブック。各章末に学習の手引きと復習課題を整備し、独習用テキストとしても最適。

■ *Pragmatics: A Resource Book for Students*, 3rd Edition. Joan Cutting 著 Routledge (Taylor and Francis).

Previously published as *Pragmatics and Discourse*, the new edition of this best-selling textbook:

\* has been revised and reorganised to focus solely on pragmatics

\* covers the core areas of the subject (context, co-text, speech acts, conversation structure, the cooperative principle, politeness) and extends to more applied areas (corpora and communities, and culture and language learning)

\* draws on a wealth of texts, from political speeches by the British Prime Minister and newspaper articles from the *Telegraph* and the *Times of India*, to extracts from Jane Austen's *Pride and Prejudice* and Arthur Miller's play *Death of a Salesman*

\* provides classic readings from the leading scholars in the discipline, including Ruth Wodak, Jonathan Culpeper, Ronald Wardhaugh and Betty Birner

\* is accompanied by a companion website featuring extra material, activities, and advice for professors and students on how to use the book.

Written by an experienced teacher and researcher, this accessible textbook is an essential resource for all students of English language and linguistics.

■ *Corpus Pragmatics: A Handbook*. Karin Aijmer, Christoph Rühlemann 編 Cambridge University Press.

Corpus linguistics is a long-established method which uses authentic language data, stored in extensive computer corpora, as the basis for linguistic research. Moving away from the traditional intuitive approach to linguistics, which used made-up examples, corpus linguistics has made a significant contribution to all areas of the field. Until very recently, corpus linguistics has focused almost exclusively on syntax and the lexicon; however corpus-based approaches to the other subfields of linguistics are now rapidly emerging, and this is the first handbook on corpus pragmatics as a field. Bringing together a team of leading scholars from around the world, this handbook looks at how the use of corpus data has informed research into different key aspects of pragmatics, including pragmatic principles, pragmatic markers, evaluation, reference, speech acts, and conversational organisation.

\* The first ever handbook on corpus pragmatics as a field

\* Brings together a team of leading scholars from around the world

\* Covers pragmatic areas of essential interest, such as pragmatic principles, speech acts,



reference and evaluation

■ Reliability in Pragmatics. Eric McCready 著  
Oxford University Press.

\* First analysis of reliability in formal pragmatics

\* Provides a detailed account of the relationship between inductive inference and linguistic phenomena

\* Offers a new approach to the foundations of the Gricean program in pragmatics

This book is an exploration of how knowledge about the reliability of information sources manifests itself in linguistic phenomena and use. It focuses on cooperation in language use and on how considerations of reliability influence what is done with the information acquired through language. Eric McCready provides a detailed account of the phenomena of hedging and evidentiality and analyses them using tools from game theory, dynamic semantics, and formal epistemology. Hedging is argued to be a mechanism used by speakers to protect their reputations for cooperativity from damage inflicted by infelicitous discourse moves. The pragmatics of evidential use is also discussed in terms of the histories of interaction that influence reputation: the author argues that past experience with the evidence source indexed by the evidential determines how the process of adding information will proceed.

The book makes many new connections between seemingly disparate aspects of linguistic meaning and practice. It will be of interest to specialists in semantics, pragmatics, and philosophy of language, as well as those in the fields of philosophy and cognitive science with an interest in language and epistemology.

■ 広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報をお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are

especially welcome. Email Hiroaki KITANO (北野浩章) at kitano -at- auecc.aichi-edu.ac.jp.

～編集後記～

日本中あちこちで火山の噴火があったり、地震がおきたり、不安な事も多いこのごろですが、会員の皆様にはますますのご活躍を願いつつ、ここにNL33号をお届けいたします。本号は、第18回大会のお知らせを掲載しており、会員の皆様からの発表ご応募をお待ちしております。また、今回も地区研究会の様子として、関東地区と九州山口地区研究会の報告を掲載いたしました。日本語用論学会の研究会が各地方で活発に行われているようです。その他、海外研修便りのようなコーナーも設けてみました。今後、単なる事務局からのお知らせだけでなく、何か会員の皆様からの声をお届け出来たらと思っております。ニューズレターにご投稿ご希望の方は、どうぞ担当者までお知らせ下さい。(鈴木光代 記)

~~~~~

[広報委員]

\* 委員長：田中廣明

\* Newsletter 編集担当：  
鈴木光代、北野浩章、堀田秀吾